

エール

—薬剤師の幸せな人生を願って—

第14回

うつ病(気分障害)の 治療にかかわろう①

精神疾患は余命が短くなり、経済的及び社会的損失につながる。このため、2013年にがん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病に加えて5大疾患のひとつとなった。

中でも、うつ病(気分障害)患者数は、2002年に68.5万人だったのが、2017年には124.6万人と大きく増加している^[1]。さらに、2004年に発表された疾患別の障害調整生命年(DALY:早死及び障害を有することによって失われる年数)では、うつ病が余命(これから先の死ぬまで寿命)にもっとも影響を与えており^[2]、早急に対策に取り組むべき疾患であると言えるだろう。

うつ病は、遺伝的素因に環境要因と身体要因が加わることで発症すると考えられている^[3]。環境要因として、家族や財産の喪失、人間関係のトラブル、家庭内不和、就職や退職、転勤、結婚や離婚、妊娠、育児、引っ越しなどの環境の変化、身体要因としては、慢性的な疲労、脳血管障害、感染症、がん、月経前や出産後、更年期などホルモンバランスの変化、降圧薬、経口避妊薬などの服用がある。

自由民主党の元・総務会長の笹川堯氏は、かつて「うつ病で休職している学校の先生はたくさんいるが、国会議員にはひとりもない。そんなに気が弱かったら務まらないから」と発言した。しかし、うつ病は気の弱い人がかかる病気ではなく、むしろ仕事熱心で、責任感が強く、真面目で、他人に気を遣い、頼まれると嫌と言えないような人がかかりやすい。

身体症状として、睡眠障害、疲労、倦怠感、食欲不振、体重減少のほかに、頭痛、頭重、性欲減退などが見られるため、内科を受診する方が多いが、うつ病の診断マーカーはまだないので、医師も診断をするのはなかなか難しいのが現状だ。精神科医は、2週間以内に次のような症状が毎日5つ(①または②を必ず含む)以上つづくと、うつ病と診断している^[4]。

①ほとんど1日中ずっと気分が沈んでいる、②何に対して

鍋島 俊隆

NPO 法人医薬品適正使用推進機構理事長/藤田医科大学客員教授/名古屋大学名誉教授/Al.I. Cuza 大学 (ルーマニア) 名誉教授

も興味がわかず、楽しめない、③食欲、体重の変化が著しい、④睡眠障害(不眠もしくは過眠)、⑤動作や話し方が遅くイライラして落ち着きがない、⑥疲れを感じ気力がわかない、⑦価値がない、あるいは申しわけないと感じる、⑧仕事や家事に集中したり、決断したりできない、⑨自殺念慮(この世から消えてしまいたいと思うことがある)

薬剤師は、うつ病の合併率が高い多発性硬化症、てんかん、パーキンソン病、慢性疲労症候群、認知症、がんなどの慢性疾患患者や、うつ病の原因となりやすい降圧薬、ホルモン製剤、抗潰瘍薬、抗パーキンソン薬、免疫調整薬、向精神薬、抗酒薬などを服用している患者(【資料1、2】)に、既述のようなうつ病の症状が見られないかを観察すべきである。そして症状があれば、処方薬などについて主治医に報告し、患者が適切な専門医にかかれるようにサポートをしよう。

【資料1】身体疾患のうつ病併発率

疾病	有病率(%)	出典
心臓病	17~27	Rudisch and Nemeroff 2003
脳血管病	14~19	Robinson 2003
アルツハイマー病	30~50	Lee and Lyketsos 2003
パーキンソン病	4~75	McDonald et al 2003
てんかん		
再発性	20~55	Kanner 2003
制御可能性	3~9	Kanner 2003
糖尿病		
自己報告	26	Anderson et al 2001
診断面接	9	Anderson et al 2001
がん	22~29	Raison and Miller 2003
HIV/エイズ	5~20	Cruess et al 2003
疼痛	30~54	Campbell et al 2003
肥満	20~30	Stunkard et al 2003
一般人	10.3	Kessler et al 1994

出典: Evans DL. et al.: Mood disorders in the medically ill: scientific review and recommendations. Biol Psychiatry 58, 175-189 (2005)

【資料2】うつ状態の原因になりやすい主な医薬品

降圧薬	レセルピン、 α -メチルドパ、 β -ブロッカー
ホルモン製剤	副腎皮質ステロイドホルモン、黄体卵胞混合ホルモン
抗潰瘍薬	ヒスタミン ₂ 受容体拮抗薬
抗結核薬	シクロセリン、エチオミド
抗パーキンソン薬	塩酸アママンタジン、L-DOPA
免疫調整薬	インターフェロン
向精神薬	ハロペリドール、チアプリド
抗酒薬	ジスルフィラム

出典: 宮岡等: 抑うつの見方と対応, 内科医のための精神症状の見方と対応, 34-35, 医学書院(1995)

Profile なべしま・としたか

1973年大阪大学大学院薬学研究科博士課程単位取得退学。名古屋大学大学院医学系研究科教授、同大学医学部附属病院薬剤部部長(併任)、名城大学大学院薬学研究科教授、名城大学比較認知科学研究所所長(併任)などを経て、現職

©(株)ファーマシイ、『TURNUP No.62』2023.4.1発行より抜粋